

「神の国の到来」

2015年10月24日

ルカによる福音書 17章 20節～25節。ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」それから、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたが、人の子の日を一日だけでも見たいと望む時が来る。しかし、見ることはできないだろう。『見よ、あそこだ』『見よ、ここだ』と人々は言うだろうが、出て行ってはならない。また、その人々の後を追いかけてもいけない。稲妻がひらめいて、大空の端から端へと輝くように、人の子もその日に現れるからである。しかし、人の子はまず必ず、多くの苦しみを受け、今の時代の者たちから排斥されることになっている。

ファリサイ派の人々が、主イエスに「神の国はいつ来るのか」と尋ねた。それに対し「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」と答えられた。神の国は死んだ後の世界や抽象的な概念ではない。神が生きて働き、神の意思が具体的に現われている世界である。

洗礼者ヨハネは過酷な獄中で、主イエスを見失ったのであろう、弟子二人を遣わし「来るべき方（メシア）は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」と問わせた。主イエスは二人の弟子に答えられた。「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである。」この言葉は「神の国」のリアリティを語っている。神の国とは、苦難の中にある者が解放され、死んだような者が生きることに向かって立ち上がり、貧しい者が喜びに包まれ、神の恵みを共有する現実である。主イエスは、「神の国」はここにある、あそこにあるというような見える形では来ない。「神の国」は命の尊厳を守り、共に平和に暮らすあなた方のただ中にある、既に到来していると語られた。主イエスを取り囲んだ民衆は「神の国」を実体験していた。しかし、ファリサイ派の人々は民衆の分かち合う歓喜を見ようとしなかった。

それから、主イエスは弟子たちに忠告された。あなた方は人の子（メシア）を見たいと熱望するが、見ることはできない。見よ、ここにいる、あそこにいると騒ぎ立てるが、出て行ってはならない。彼らはメシアではなく、偽メシアであるから、後を追ってはならない。当時、メシアを名乗り、人々を惹きつける人が次々と現われたが、皆殺され、仲間たちは四散した。稲妻がひらめき、大空をかけて輝く日、終末の日に、人の子（メシア）が現われる。しかし、その前に、人の子（主イエス）は苦しみを受け、時代の者（エルサレム神殿当局）たちに排斥され、十字架の死を負わせられる。

キリスト教信仰は、主イエスの十字架と復活によって、全ての人の生を「よし」としてくださった福音を信じ、命を愛し、互いに平和に生きようとすることである。この「神の国」は信仰において見、既に「神の国」の住人にされている。しかし、完全なものを受け取っていない。完全なものは未だ目に見えず、歴史の終りの終末時に与えられる。私たちは「既に」と「未だ」の狭間にある。終末時の完成を望み、神の国の住人とされている「今」を希望とユーモアを持って、時代の苦悩を担って誠実に生きるのである。（続く）